とある召使の憂鬱

barth

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある召使の憂鬱

【Ｎコード】
Ｎ６７１４Ｅ

【作者名】
ｂａｒｔｈ

【あらすじ】
戸澤家にいる召使、高峰恭一は周囲からの評価が低い。いわく、太ってて召使らしくない。いわく、不細工で気持ち悪い。いわく、内気でとっつきにくい。でも、評価というのは必ずしも正しい訳じゃあない。まして相手が彼ともすれば、肥満も内気も不細工も、名実共に瞬時に吹き飛び砕け散る。なんでって？それは実際見てからのお楽しみ。

プロローグ

その日は、雨が降っていた。
土砂降りの雨は、僅か一メートル先さえ霞ませる。
痛い程の雨を全身に受け、少年は立っていた。
目の前に広がる風景は、墓、墓、墓。見渡す限りの墓場は、数え切れない程の死人を飲み込んでいる。
少年の両親も、ついさっき此処に飲み込まれた所だった。
真っ黒な服で、絶望に染まった瞳の少年は、まるで人形のように、ただ、立ち尽くしていた。
そんな少年の後ろから、不意に近付く影が、一つ。
影は少年の真後ろにまで来ると、そっと自分の傘に少年をいれる。
「……」
まるで周りになど関心を示さない少年に、影の主から言葉が掛かった。
「うちに、来ないかい？」
「……」
優しそうな男の声だった。だからだろうか、少年はゆっくり振り返ると、生気の無い瞳で男を見上げる。
「……おいで」
男が少年に手を差し出し、言う。少年は無表情で、だがしっかりと、男の手を握った。
こうして、高峰（たかみね）　恭一（きょういち）は、戸澤家で暮らす事となったのである。

召使、堪忍袋の尾が切れる

「もうっ！　早くしなさい！　ほんっと愚図なんだから！！」

夏の朝日が体力を削る中、醜い罵りの言葉が響く。

場所は閑静な住宅街。そこに一人の少女が仁王立ちし、後方から来る人影を苛々した様子で睨んでいる。

少女の名は戸澤（とざわ）　怜香（れいか）　十七歳。父親が大手貿易会社の社長をしており、家は代々続く由緒正しいお家と言う、名実共に完璧なお嬢様だ。

容姿は、流れるような艶やかな黒髪、くりっとしたやや吊り上がり気味の目、すっと通った鼻筋にかわいらしい唇。少しキツそうだが間違いなく美少女。

美少女でお嬢様、加えて成績優秀、運動神経抜群、清楚可憐、品行方正。男女問わずに膨大な支持を得る生徒会長とくれば、正に完全無欠である。天は彼女にニ物どころか全物を与えたのではなかろうかと、彼女を知る者は大抵が考える。

では、そんな彼女が何故このような言葉使いをしているのか？

答えは簡単だ。つまり、天は彼女に猫かぶりの才まで与えていたという事である。

「も、申し訳ありません。お嬢様」

その時、やっと彼女に追い付いた人影が、大量の汗をかきつつ、絶え絶えの息をしながら答えた。

答えたその少年は、脂ぎった顔を疲労でゆがめている。少年の表情を見て、怜香が汚い物でも見るかのような顔をする。

少年の名は、高峰（たかみね）　恭一（きょういち）　十七歳。不細工で肥満で内気な召使と言うのが、彼の周りの人間が下した評価だった。

恭一は幼い頃に怜香の父親である誠二が連れて来て、七歳の頃から怜香付きの召使として働いている。何か役に立ちたいと恭一が誠二に訴えた為、娘と歳も近いから良い話し相手にと誠二がそうした

のだ。
　しかし、此処が恭一の不幸の始まりだった。怜香は恭一を便利な道具として使い始めたのである。恭一が年を経る毎に不細工になり、太っていくにつれ、怜香の態度は益々悪化していった。今では常に何らかの罵声や皮肉を浴びる毎日である。
「全く、なんて使えない召使かしら。所詮食べ物にしか興味が無い意地汚い生き物なのね」
　突き放すように言うと、怜香はまたさっさと歩きだした。恭一は未だぜいぜいと苦しそうに息を吐いている。
「ほら、さっさと来なさい！　あんたが来ないと私の荷物もそのままなんだからね！　今度遅れたら夕食抜きよ！！」
　怜香の荷物は恭一が持っている。
怜香が持った方が効率的なのだが、生憎彼女に荷物を持つ気はさらさら無い。恭一は怜香が自分をなぶってストレス発散でもしているのかと思っていたが、後にそうでない事を知る。そんな怜香の言葉に恭一が堪らず声を上げた。
「お、お嬢様。これ以上食べ物を減らされたら死んでしまいます」
　実は恭一は最近怜香から太りすぎと言う理由でかなり厳しい食事制限を受けているのだ。
おかげで今朝も歩いている最中に何度も腹が鳴っていた。
　が、そんな言葉が目の前の少女に届く筈がない。
「あら、それだけ脂肪があるんだから簡単には死なないわよ。言いたい事はそれだけ？　なら私は行くわ」
　冷徹に告げ、さっきより幾分速めに歩きだす怜香。
　恭一は諦めて主のもとをぜいぜいと呻きながら必死になってついて行った。
　やがて学校に着き、ようやく恭一は重り付きのマラソンから解放された。
　怜香の机に荷物を置き、倒れ込むように自分の席に着く。その際に怜香が、

「ありがとう恭一君。いつも悪いわね」
等といつもの猫かぶりをしていたが、疲労困憊の恭一はそれに反応する体力さえ残っていなかった。
席に着いた途端、怜香の周りには男女問わず人が集まり、逆に恭一には誰一人として目を向けなかった。
当初はあの怜香お嬢様に最も近い存在と考えられ、嫉妬の的となっていたが、今では皆使えない駄目な召使としてしか捉えていない。恭一も進んで友人を作るような性格でもなく、孤立していたが、恭一自身は別段気にしていない様子だった。
恭一が誰と話すでも無くだれている間に、学校のチャイムがなり、教師が入って来る。後はどこにでもあるような普通の高校生活だった。
授業を受け、昼には弁当を食べ、また授業を受けて、気が付けば放課後である。
素早く自分の荷物をまとめ、怜香の荷物を取りに行くと、怜香は既に自分の荷物をまとめ終えていた。怜香は一瞬恭一を睨み、すぐに猫をかぶった笑顔で言った。
「悪いわね恭一君、実は生徒会の会議があるのよ」
こういう時、恭一は大抵生徒会室の入口で延々と待たされる。今日もそうだと思っていた。生徒会室に行くまでは。
放課後の人気の無い廊下を怜香と共に進み、生徒会室に着くと、怜香から思わぬ言葉が発せられた。
「今日はあんたも来なさい」
「え？」
人気がないのか素に戻っている怜香。彼女の聞き慣れない台詞に恭一が聞き返す。
「いいから来るのよ」
いつもなら罵声を飛ばす恭一の反応にも、何故か無反応で怜香は生徒会室に入って行った。心なしか恭一には、怜香が笑っているようにさえ見えた。

「あ、お、お嬢様」
慌てて怜香の後を追う恭一。
彼が開いた戸をくぐると、怜香はつかつかと部屋の奥へ歩いて行き、生徒会の仲間らしい二人の少女の元へ行く所だった。
対して恭一はどうしていいか判らず入口を抜けた所に棒立ちしている。
「何をしてるの？　早く来なさい」
少女達と合流した怜香が振り返って言い放つ。やはり、その顔はどこかしら愉快そうである。
訳も判らず怜香の元まで歩きだす恭一。
突然、生徒会室の戸が閉められ、カチャリと鍵が掛けられた。
「？」
なんだと後ろを振り向く恭一の目に入ったのは、にやつく屈強そうな男達の姿。
何かおかしいと感じ、恭一が口を開く。
「お、お嬢様、これは？」
「うわ～、よく見るとほんと気持ち悪～い。生徒会長よくこんな変な生き物側に置いてますね」
恭一が尋ねるのとほぼ同時に、怜香の側にいた一人が恭一を気味悪そうに見て怜香に話し掛けた。
「まあね、お父様にさりげなく召使から外すようお願いしたんだけど、うまくいかなくて。大体あれだけ嫌がらせしているのに辞めたがらないなんて、恭一、あんたマゾなの？」
心底うんざりした様子で恭一に言う怜香。
彼女の問いに恭一が答える間もなく別の少女が口を開く。
「きっとそうですよ。生徒会長の鞄を持ちながら罵しられる事で興奮してるんじゃないですか？　だっていかにも変態って感じですもん」
「やっぱりそう思う？　全く、お父様はなんでこんな屑を拾ったりなんかしたのかしら」

ふうっとため息をつくと、怜香は後ろにあった机に腰掛ける。そして恭一に向けて言った。
「恭一、あんたもう高校生なんだし、いい加減出ていってくれない？　正直気持ち悪いのよ」
どうやら此処にいる人達は素の怜香を知っており、彼女が目的を果たす手伝いをするように集めたらしかった。取り巻きの女二人は精神的に、後ろにいる男達は肉体的に恭一を追い詰める役目のようだ。恭一が確実に召使を辞めるように。
状況を理解しつつ、恭一はびくびくしながらも、懸命な口調で言った。
「わ、私は拾って下さった旦那様の恩に報いるため、召使をしています。お、お嬢様、どうか」
「そこにいる彼等、レスリング部の精鋭達よ。骨の一本や二本じゃすまないかもね♪　さ、もう一度聞くわ、出ていってくれない？　恭一」
「そーよ、御主人様が出てけっつってんだから素直に出ていきなさいよ変態！」
「全く、恩を返したいならあんたが消えるのが一番なのよ役立たず」
怜香達の言葉を受けながらも、恭一は首を縦には振らなかった。
「……できません」
恭一のか細い台詞に、怜香はより一層恭一を罵りだした取り巻きを手で制すと、口を開く。
「ふうん、どうしても？」
「……はい」
恭一の返事を確認すると、怜香はぞっとする程冷たい笑みを浮かべた。
「ふふふ、そう。じゃあ仕方ないわね。　皆さん、お願いして宜しいかしら？」
怜香の声で恭一を一斉に取り囲む男達。それを見て怜香は笑い混じりに恭一に言った。

「恭一、あんたは今日、この教室で私を襲うの。それをたまたま通りかかったレスリング部の皆さんが駆け付けて私は無事保護、あんたはボコボコにされて退学。どう？　ベタだけど中々良いと思わない？」
　怜香が話し終わるや否や、恭一の鳩尾に強烈な一撃が叩き込まれる。
　ぐふっと言う声と共に倒れる恭一をいくつもの足が踏み付けていった。
「おいおい、これで終わりかよ、もっと根性見せろよマゾ野郎」
「はは、やっぱお嬢様じゃなきゃいや～ってか」
「うわ、気持ち悪っ。この豚野郎が」
　罵声を浴びせながら踏み付け、蹴り続ける男達の足の隙間から恭一の手が虚空に伸びた。それを見て取り巻きが笑いながら罵る。
「うわ～、見てあの手、指が芋虫みたい。気持ち悪～」
　不意に、恭一の手が握られた。と、次の瞬間。
「だあああ！！！！　やってられっかーーーー！！！！！」
　いきなり部屋一杯に絶叫が響き、恭一ががばっと起き上がったではないか。
　あまりに突然の出来事に部屋に居た全員が停止する。
　恭一は何を思ったかその中途半端に長いぼさぼさの髪を掴むと、あろうことか床にそれを叩きつけたのだ。それだけではない。今度は耳の後ろ辺りに手を当てると、一気に顔を、いや、顔だったものを剥ぎ取った。
　くすんだ茶色のぼさぼさ頭と下膨れの不細工顔の下から、長めの流麗な黒髪に、鋭い目付きの凛々しい顔が姿を現した。
　次に恭一は首の付け根辺りに手をやると、ぐっと力を入れた。カチッと言う音と共に、恭一の全身が崩れたように他人の目には映っただろう。だが実際は、恭一を覆っていた脂肪だったものが落ちたのだ。同時にズボンもずり落ち、中からスパッツ姿の引き締まった下半身が現れる。

更に恭一は自分の手をつかむと一気にそれを引き抜いた。その下から新しく現れた細めだが程よく筋肉の付いた腕で、もう一方の手も引き抜く。
すると今度は片手で学生服を勢いよく開いた。ブチブチッとボタンが飛び散り、次のシャツも同じようにする。
だぼだぼになった制服を脱ぎ捨てると、下半身と同じすらっとして程よく引き締まった上半身がピッタリと体にフィットした半袖の黒い肌着姿で現れた。
正に別人となった恭一は、すっと歩きだし、呆然と立ち尽くす男達の輪を抜けると、
「ふんっ！！」
凶悪な速度のローリングソバットを繰り出した。
「あばっ！？」
勢いよく吹っ飛び壁に激突した男は、そのまま沈黙する。
「さあて、始めようか」
ニタリと笑う恭一の目は、怒り狂った猛獣の如く凶暴で、尚且つ異常な輝きを放っていた。
「「「ひ、ひぃぃぃぃ！！」」」
目の前で起きた異常事態で混乱する頭に叩きつけられた恭一のあまり迫力に、男達は恐慌状態に陥り揃って逃げ出し始めた。
恭一は楽しそうにそれを見つめながら、
「誰にしよっかな～」
と指を巡らせると、ある男に向けてぴたりと止める。
「決～めた」
瞬間、恭一は指差した男の真後ろまで行き、後ろから両腕でがっちりと腰を固定した。
「おらぁ！！」
「ぎゃぶべ！！！！」
そのまま背を反って男を床に叩きつけた恭一。物凄い音を立てて叩きつけられた男は泡を吹いて失神した。

恭一は瞬時に起きると、男の悲鳴に反射的に振り向いてしまった別の男の左右のこめかみを親指と人差し指で掴む。
「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！」
掴んだ男が失禁し、気絶すると、入口に鍵をかけた事も忘れて必死に戸を開けようとしている男に後ろから飛び乗り、肩車の格好から両足をクロスさせると、ふとももで男の首を絞め上げた。
「ぐ、ぐぇぇぇぇ」
ある程度絞めた所で一瞬前屈みになり、そのあと思いきり背を反って男を後ろに投げ捨てた。
「ぶごっ！！」
恭一は意識を残しているレスリング部の最後の一人に視線を向ける。
「ひっ、ひっ」
腰が抜けたのかぺたりと座りこむ男に近付くと、襟を掴んで持ち上げた。
「た、助け、あがあああ！！」
男の命乞いの途中でコブラツイスト。
「ギ、ギブ……あぎゃ！！」
最後にばきりと言う音を響かせ、レスリング部は全滅した。
「あ〜、すっきりした」
男をポイっと捨てると、恭一は脱ぎ捨てた学生服を羽織り、ズボンはベルトを絞める事で何とか履き、靴をひっくり返して足だったものを床に落とすと、すっかりぶかぶかになったそれを履いた。
そこまでした所で、恭一に声がかけられる。
「あなた……誰よ」
恭一が顔を向けると、青ざめた顔の怜香がじっと恭一を見つめていた。

召使、堪忍袋の尾が切れる（後書き）

はい、どうも皆様こんにちわ。いや～恭一君暴れまくりですね。さてさて次回はどうなる事やら。

召使、仕事を辞める（前書き）

今回は話の区切りをよくしようとしたら短くなってしまいました。
まだまだ未熟です。

召使、仕事を辞める

未だ状況が飲み込めておらず、困惑する怜香に対し、恭一が馬鹿にするような口調で言った。
「はっ！　俺が誰かって？　高峰　恭一に決まってんだろ」
「ふざけないで！　あんたが恭一の訳無いじゃない！！」
叫ぶ怜香を前に恭一はぼそっと呟く。
「……馬鹿女」
「なんですって！」
恭一の侮辱に怜香が憤慨するが、恭一は全く動じる事なく、それどころか心底馬鹿にするように言った。
「お前は自分を何だと思ってる？　天下の戸澤家の一人娘だぞ？　そんなのが護衛も無しにうろついたらどうなるかよく考えろ馬鹿」
恭一の態度に込み上げる怒りを何とか抑え、努めて冷静に返す怜香。
「それとあんたが恭一だっていう事と何の関係があるのよ？」
怜香の言葉に恭一は心底呆れたような表情をし、そして怠そうに話し始めた。
「全部説明しないと判らないか、マジで馬鹿だな。いいか？　ターゲットにいかにも強そうな護衛が居たとして、狙ってる奴らはどう動く？　単純に襲ってくるか？　いや、来ない。
どんな馬鹿でも護衛がいると知ったら多少なりとも策を練るもんだ。じゃあ、ターゲットの側にいるのがいかにもトロくて使えなさそうな召使だったらどうだ？　ちょっと襲っただけで簡単に誘拐出来そうだと思うだろ。つまりそーゆー事だ。ついでに、不細工で内気で気弱ならマイナス評価の情報が流れやすいし、護衛の邪魔になるような生徒なんかも寄って来ない。ほんと、苦労したぜ、擬似脂肪は動きずれーし、性格はストレス溜まるし、何より護衛対象が最悪だし」

後半から顔を苦々しく歪め、文句を垂れる恭一。
対して怜香は、屈辱に振るえていた。自分が長年蔑み、馬鹿にしていた相手にまさか守られていたなど夢にも思っていなかったのだろう。
「……いつから？」
「ん？」
「いつから護衛なんてしてたのよ？」
恭一をキッと睨み付けながら怜香が問う。
一体いつから騙していたのかと、目が言っていた。
「バーカ、んなもん始めからに決まってんだろ」
「始め……え？　まさか……」
怜香を彩ったのは驚愕と、呆然。
無理もないだろう。当時七歳の子供がボディーガードとして機能するとは考えられない。
しかし、思い出せと怜香は思う。恭一が太り始めたのはいつからだろうか？内気なのは？顔に今の面影が無くなったのは？と。
目の前の男の言葉が事実なのだと、怜香がそう理解するのに時間はいらなかった。
「さって、こんなもんか、なっと」
信じられない告白に息を飲む怜香をよそに、恭一はあらかた鞄に変装セットを詰め終えたらしい。鞄を肩に担ぎ、学生服のポケットから携帯電話を取り出すと、どこかにかけはじめた。
数コールして相手がでる。
『主任？　何かあったんですか？』
電話に出たのは若い女の声だった。
「あ、奈津？　俺辞めるわ」
『……は？』
「だから、辞めるわ。護衛」
『えっちょっ、どうしたんですか急に！？』
まるで遊びに行くかのような気軽過ぎる、だが内容は決して気軽

ではない言葉に奈津と呼ばれた電話の相手は酷く困惑していた。
「どーしたもこーしたも、もうウンザリだよ。飯は減らされ、荷物は持たされ、事あるごとに侮辱され。それだけならまだしも、今日なんか空き部屋で散々文句言われてリンチだぞリンチ！！　こんな恩知らずの性悪馬鹿女の護衛なんぞ、やってられっかあ！！！！」
『わっ、わっ、え、えぇと』
思い出して怒りが再燃したらしい。恭一は電話の向こうで狼狽する奈津をよそに吠えると、勢いよく電話を切る。
「さて、そーゆー事だから、アバヨ馬鹿女」
携帯電話を仕舞いながら恭一はそう言い捨てると入口へ行き、生徒会室のドアを蹴破った。そのまま振り返る事も無く部屋を出ていく。
怜香は呆然とその様子を見つめていた。
あまりにも突飛な出来事の連続に、頭が理解に追い付かないのだろう。
「なんなのよ。一体」
静まり返った部屋に、怜香のようやく絞り出した渇いた呟きが響いた。
恭一が出てからしばらくして、怜香は男達の処理を取り巻きに任せ、一人帰路についていた。
「どうなってるのよ。私一人だけ知らない所で色々仕掛けてるって事？　冗談じゃない」
時が経つにつれ、多少落ち着いた怜香はブツブツ文句を言いながら屋敷への道を不機嫌そうに大股で歩いてゆく。欺かれていた事や自分の知らない所で色々とやられる事が大いに不満のようだ。
怜香の顔には帰ったら屋敷の人間に色々問い詰めてやるという燃えるような決意が見て取れた。
「あの、すみません」
不意に、怜香の肩に手が置かれ何者かが声を掛けた。
端から見ても不機嫌なオーラを充分過ぎる程噴き出している怜香

に話し掛けるとは、一体どれだけの命知らずか。
「なんですかっ！」
睨み殺さんばかりの勢いで怜香が振り向く。
瞬間、怜香の全身がビクンと震えたかと思えば、その場に倒れ伏した。
「ほらっ急いで乗せろ！」
「分かってる！」
いつの間に近付いたのか、怜香のすぐ隣まで来ていた黒のワゴン車のドアが開けられ、中から男が手を伸ばしていた。
怜香を気絶させた男は持っているスタンガンを懐に仕舞うと、ぐったりした怜香を車内の男と車に詰め、自分も車に乗り込む。
その日、恭一が護衛を辞めて僅か一時間半後に、怜香は消息を絶ったのだった。

召使、仕事を辞める（後書き）

さて、お嬢様掠われてしまいました。ところで……スタンガンと電気鰻ってどっちが強いんだろ？

召使、頼まれる（前書き）

随分間が開いてしまいましたが、今回もまた短めなのです。うう、文才が欲しい

召使、頼まれる

何処かのビルの廊下と思しき場所。怜香の父、誠二が、落ち着いた足どりで歩いていた。誠二は淀みなく進み、ある部屋の前で一度止まるとノックも無しに扉を開ける。

「よっ」

入って来た誠二に軽い挨拶が飛ぶ。

部屋に居たのは、恭一だった。学生服姿でも変装してもおらず、乱れたスーツ姿でソファーに体を沈め、組んだ足をテーブルに乗せたまま煙草をくわえている。

誠二は恭一の様子を見ると、別に驚くでもなく対面のソファーに腰を落ろした。そして、ため息混じりに話し出す。

「……あのじゃじゃ馬が掠われた」

誠二の言葉に恭一は大して驚きもせずに返す。

「ふ～ん。で？」

「助け出してくれないか？」

「嫌だ」

即座に拒否する恭一。その言葉を聞いて誠二が唸る。

「むう、そう言わずに」

「やだって、俺はもう辞めたんだ。大体、他の奴らは何してんだよ？」

「いや、頑張ってくれてはいるんだが……」

「手掛かり無し、と」

「う、うむ」

「はあ、何やってんだか」

不甲斐ない元部下達に脱力する恭一に、誠二がぱんっと両手を顔の前に合わせる。

「な、だから頼まれてくれないか？」

「……正直、おっさんには感謝してる。二親が死んだ俺を引き取っ

てくれたし、仕事もくれた。でもな……」
目をつぶり、昔を思い出しているような素振りをしていた恭一の手が、軋む程強く握りしめられる。
「十年だぞ十年！！　あンのじゃじゃ馬に付き合って何度死に目を見たかっ！　しかも当の本人は良いように俺を使いぱしりやがる！！」
カッと目を開いて辺りに唾を撒き散らす恭一はひとしきり言い終えると、だらりと頭を垂らした。まるで疲れきった中高年のような雰囲気を醸し出している。
「もう良いだろおっさん？　充分恩は返した筈だ」
「はあ、あの馬鹿娘に随分やられたようだな。報告では聞いていたが……そんなにか？」
「正直、何度トリガーに指がかかったか分からねぇ。次会ったら撃ち抜く危険性があるな……」
恭一の言葉に何度目かのため息をつく誠二。何処かしら情けないような、しょんぼりとした視線を恭一に向ける。
どこか居心地悪い、悪人になったのではと感じさせる視線に恭一は顔を歪めた。
「んな顔すんなよおっさん。ほら、俺じゃなくても色々いるだろ？　傭兵とか何でも屋の類とか」
「むぅ……」
未だ残念そうな表情の誠二に恭一は説得を続ける。
「確かに身内で解決できないのは恥を晒す事になるかもしんねーけど、事が事だ。奈津が見つけられない以上、犯人はよっぽどの考え無しかプロか。プロなら手荒な真似はしないだろうが、そう簡単に居場所は割れない。馬鹿なら……」
「ば、馬鹿なら？」
急に黙り込んだ恭一に誠二が不安気に問う。
「貞操の危機。どっちにせよ急いで何か手配しないとやばいぞ？」
「なあっ！？」

間を置いての恭一の言葉に、誠二がガタンと立ち上がり目を剥く。
すっかり身代金目的とばかり考えていた誠二は恭一の一言に不意打ちされ、滝のような汗を流し俯いていた。
「ま、見た目だけは、悪くないしなアレ」
見た目だけは、の部分を強調しながら恭一が言う。
が、誠二には聞こえていないのか、ガクガクと震えるばかりで反応が無い。
「ん？　おい、おっさん？　おーい、起きろー」
流石に不信に思ったのか、誠二の前に手を翳し、ひらひらと揺らす恭一。
瞬間。
「う、うおおお！！　怜香には指一本触らせんぞおお！！」
突然の咆哮に中腰で様子を伺っていた恭一がびくっと肩を振るわせるのを尻目に、誠二は懐から携帯電話を取り出すと、凄まじい勢いでダイヤルを押し始めた。
「はあ」
ようやく他に目が向いたとばかりに、恭一が疲れた息を吐く。
同時に、誠二が電話の向こうに盛大に唾を撒き散らし始める。
「け、警備部か！？　怜香は、怜香の居場所はわかったのか！？ぬ、ぬぅわにゅい！？」
「いや、警備部じゃ無理だろ。奈津は良くも悪くも大衆的だ。闇やドブ臭い方面にゃ疎い。当分は難しいだろうな」
ぎゃあぎゃあと叫ぶ誠二に向けてか、それとも唯の独り言か。小さく囁いた恭一は、もう用は無いとばかりに誠二の横を通り過ぎようとする。
「っ！？」
その時ぴたりと、彼の歩みが止まった。まるで床に吸い込まれてしまうような違和感を感じ、不信気に後ろ足を振り返る。
「……なんだ？　っておっさん！？」
彼の目に映ったのは、足にへばり付き、涙と鼻水を垂れ流す誠二

の姿。
　元雇い主兼保護者の憐れに過ぎる様子を目の当たりにして、恭一が若干たじろぐ。
「い、いや、泣くなよ、おっさん。うわっ、鼻水鼻水！」
　がっしりと恭一の足を捕らえた誠二がなんとも情けない声を上げた。
「き、恭一～、怜香が、怜香がぁぁぁぁ」
「……もしかして、薮蛇だったか？」
　ぽつりと呟く恭一。
　いつまで経っても諦める気配が見えなかった誠二に他の、もっと聞き分けの良い業者へと目を向けさせるつもりが、逆に切羽詰まって自分に追い縋らせる羽目になろうとは、彼にとってとんだ誤算だった。
「……できりゃ関わりたく無いんだがなあ」
「恭一ぃぃぃぃ」
　しつこい位に足に食らい付く誠二に向かって、恭一が一際大きなため息をゆっくり、盛大に吐いた。
「はぁぁ、二千」
「ぬぅ？」
　言葉の意図を掴みかね間の抜けた返答を返す誠二に、恭一が先程に比べ幾分か自棄になったような口調で言った。
「前金二千、後金は適当に決めてくれ」
　言い回しにも自棄になっている事がありありと見て取れる恭一に、途端に誠二が喜色満面といった様子ではい上がり抱き着いた。
「そうか、引き受けてくれるか恭一！！　ありがとう！　ありがとう！！」
　放って置いたらキスでもしてくるのでは無かろうかと思わせんばかりのはしゃぎ様である。
　先程とは打って変わり満面の笑みで涙と鼻水を垂れ流す様は、中々に見苦しい。元が渋い感じの中年なだけに尚更それが際立ってい

る。
「ああ、はいはいやるよやりゃいんだろ。はあ、あんな馬鹿でも娘は可愛いって事か」
「当然だ！！」
「……ったく」
一もニもなく即答する誠二を横目に頭をばりばりとかくと、恭一は誠二を引きはがし、新たに出した煙草をくわえた。
「まあ、しょうがねえか」
諦めた恭一は一度、肺一杯に煙を吸い込む。
煙を吐いた時、そこにはもう先程までの恭一は居なかった。
脳内ではめぼしい情報屋のリストを洗い、眼光は鈍い輝きを放つ。
弛んだ空気を一瞬で駆逐し、見る者に無意識レベルでの緊張を与える。
それは使用人でも、誠二の義理の息子でも、ましてや一介の学生などでは決して有り得ない裂帛の空気。
これが恭一の、裏。
冴えない使用人を演じる傍らで、幾十の危険を葬って来た彼の姿。
「今日中に、始末する」
静かに、抑揚なく呟いた恭一。
彼の声は、まるで全てを飲み込み一片さえも残さず消し滅ぼすかのような深く、鋭い意思が通っていた。
「っ……」
あまりの恭一の変化に、誠二までもが、ただ全身を蝕む寒気に震え、生唾を飲む。
恭一は他には何も言わず、ゆっくりと出ていった。溢れ出た濃密な気配だけを、そこに残して。

召使、頼まれる（後書き）

誠二さんは親バカです。次回はちょこっと真面目な雰囲気。

召使、情報収集す（前書き）

これから少しシリアスな雰囲気が続きます。

召使、情報収集す

そこは、平凡で地味な居酒屋だった。
若者向けの小洒落た雰囲気も無く、大手のチェーン店でも無い。
昔ながらの、良く言えば赴き深い、悪く言えば古臭い店内に今居るのは、着物姿の男が一人。
やや白髪混じりの様子はある程度齢を重ねたように見受けられるが、顔はまだ若年と言っても良い。身に纏う空気はどこか枯れた、老人のような雰囲気を匂わせ、割りかし整った表情は常に物事を達観したような微笑。
男を形作る全てが、彼が生きて来た年月を曖昧にさせる印象を放つ。
彼は今、カウンター下の棚にある酒瓶や、漬け物の在庫を確認していた。
「えーと、これと、これがそろそろ無いですね……あれ、この間買い足さなかったかな？」
落ち着いた印象の声でぶつぶつと呟きながら、以外と奥行きのある棚を覗き込む。
その時突然、男の動きが止まった。
屈んだまま一切の動きを停止し、驚く程鋭い視線だけを後方へ飛ばす。
「やれやれ、まだ開店していないんですけどね」
視界の隅に映った人影を見て、男が苦笑して言った。
先程の一瞬垣間見えた厳しい視線など、まるで無かったかのように男の声には親しみが込められている。
男の言葉に反応してか、後ろに潜んでいた人影がゆっくりとその姿を晒した。
「おや、また随分重装備じゃないですか。恭一君」
立ち上がり、振り向いた男が僅かに目を見開き、驚いた表情を見

せる。
男の前には、黒いロングコートを羽織った恭一が自然な体勢で立っていた。
見た限りでは重装備と言うような物の類は映らない。
「ああ。聞きたい事がある」
軽く返答した恭一が早速本題を切り出した。
「……随分余裕が無いようですね。内容は？」
普段なら酒の一杯でも交わしながら話す二人だが、今日はそう悠長にしている暇は無いようだ。
普段店に来る時より幾分か厳しい恭一の様子に、男は出しかけていたグラスを元に戻す。
「近頃戸澤に対し怪しい動きを見せていた組織。規模は問わない。それとクズ共のたまり場。誘拐を容認する程度のランク。範囲は県内。ただし、一流か最低かのどっちかだ」
淡々と語る恭一を見ていた男が、若干考えるような仕種を取った。
「ふむ、そうですねえ」
右手を額に当て、目をつぶる男。
数秒の間そうして黙考していた彼が右手を降ろすと、そこには先程の親しみを込めた笑顔は無く、商売人の笑顔が浮かんでいた。
「該当は、三件ですね」
指を立てて柔和な笑顔を晒す男。
彼の笑顔が何を催促しているのか、恭一は長い付き合いで良く分かっていた。言わないと彼はこれ以上一言たりとも喋らないであろう事も。
「報酬は言い値を出す。そのかわり」
「はいはい、出し惜しみは致しません。」
恭一の言葉を打ち切り、後を続ける男。
彼は優秀な情報屋であると同時に、有能な商売人でもあった。足元は見れるだけ見る。
故に、具体的な金額を提示すれば、出し惜しみ追加要求をするか、

更に値段を吊り上げるかのどちらかだ。
その分、出鱈目な情報は決して無い。また、叩いて出て来ない情報も、決して無い。だからこそ、彼の存在はこの上無い価値を持つ。
彼の事は、戸澤の誰にも教えてはいない。恭一の隠し手の一つだ。
「さて、では一番の有力株から行きましょうか」
相変わらずの微笑を浮かべながら、男が腕を組んで話し始める。
「先ずは火天の下部組織、士熱ですね。動きが活発になったのは先週から、武装は一級、ただし狙撃系はありません。人数は――」
一体どうやっているのか、この男にかかれば国家機密から路地裏の喧嘩、定期試験の問題まで、あらゆる情報が入って来る。
組織と場所だけを聞いた筈が、装備、人員の規模、戦闘の熟練度に至るまで情報が得られた。相変わらずの手腕に、毎度の事ながら恭一は内心舌を巻く。
「――と、こんな所ですか。ああ、そうそう」
不意に思い出したように男が終わりかけていた話を再び紡いだ。
「柳水がこそこそ動いていますから、恐らく何かを嗅ぎ付けて取り入るつもりじゃないでしょうか。身持ちは固くした方が懸命ですね」
最後におどけるようにそう忠告を入れ、一通り話し終えた男は組んだ腕を解き、息をついた。
「それにしても、甘いですね。相変わらず」
柔らかい口調で言った男の顔は、既に友人のそれ。
穏やかだが、内心を透かされているような微笑に、恭一は視線を男から僅かにずらす。
「何の事だよ？」
呻くように、まるで何も読み取られまいと必死に内心を隠しているかの如く呟いた恭一に、男は微笑を苦笑に変えた。
「やれやれ、それでは認めたようなものでしょうに」
言って、男は細めていた目を微かに開く。
漆黒の、見た物を貫き通すかのような威圧を持った瞳が、男が何か大事な、上辺だけではない言葉を発しようとしている事を表して

いた。
「今回の事、関われば二度と抜けられないんじゃないですか？」
視線を逸らしたにも関わらず、ごまかしの効かない迫力が恭一に突き刺さる。
「分かってる。けど」
「貴方は、十分尽くして来たと思いますよ」
何かを言わんとした恭一を遮る男。
彼の目には、利害も駆け引きも無い、ただ純粋に友人として恭一を気遣う意志だけが宿っていた。
「確かに貴方は戸澤家に救われた。それは事実です。でも、それでも貴方が潰して来た陰は十や二十ではきかない筈です。せっかく自由になったのに、わざわざ自分から檻に戻るのですか？　待つのは終わりの無い従属、いや、隷属と言っても良い。本当にそれで納得しているのですか？」
男の言葉に、恭一は沈黙したまま何も言わない。恭一の様子を見て、更に彼は続ける。
「ここまで来れば、後は戸澤家ご自慢の警備部に任せても問題無いでしょう。先程の情報があれば、十分対処出来る筈です」
未だ俯き、微動だにしない恭一を真っ直ぐに見つめながら、彼の話は結論へと辿り着く。
「もう、良いんじゃないですか？　普通の生活にしろこっち側の生活にしろ、戸澤から解放されても」
彼はずっと見て来た。掛け替えの無い恩人であり、友人でもある恭一がどれだけ戸澤家に尽くして来たのか。私生活に及ぶ程の様々な制約、にも関わらず待っているのは罵倒と戦場。文句を言いこそすれ、彼の仕事に手抜かりは一切無い。十年間、彼は驚く程誠実に戸澤を護り続けた。
だからこそ、一使用人などではなく彼の仕事に相応しい立場をと、男は常々思っていた。
血反吐を吐いて守り抜いた対象に乏しめられると言うのは、生半

可に堪えられる事ではない。
恭一は、今でこそ端から見れば一流の護衛だが、根底はとても甘い人間である事を男は知っている。そう、捨て駒を自身の命と天秤にかけてまでわざわざ助けるような、およそ信じ難い甘さを。
思わず過去に耽り、一瞬意識が別の所に行ってしまった男が恭一に視線を戻すと、丁度彼の口が開いた所だった。
「警備部の奴らだけだと心許ない。探索には使えるが、相手次第では下手を打つ可能性があるからな。それに、俺以上の腕がある奴が居る筈も無いし」
恭一の口から出た言葉は口調こそ彼らしいものだが、酷く事務的で、感情の見えないものだった。
「やっぱり、聞いてはくれませんか」
諦めたように軽く、酷く哀しい笑顔を浮かべて、男は近くの棚からグラスを出す。
「本当に貴方は、人にはずかずか干渉する癖に」
笑っているが、どこか拗ねたような口ぶりで男はグラスを恭一に放った。
「そういう性分だしな。悪い、蒼馬(そうま)」
受け取ったグラスを顔の位置まで持ち上げた恭一の顔に、ここへ来て初めて笑顔と呼べるものが見られた。ほんの些細な、口元だけの笑みだったが。
それを見た男、蒼馬はやれやれと息を吐く。
恭一とて何も考えていない訳では無い。問題は、それを他人に見せない事だ。
彼は崩れない、彼は倒れない、彼は、頼らない。周りが心配する度に、彼はいつも格好つけて一人で何とかしようとする。実際に一人で何とかなってしまうので、余計に性質が悪いと蒼馬は思う。今回の辞職も、何か理由が有るのだろう。当然、彼が言う筈も無いが。
蒼馬が恭一に現状打破を言い渡したのは初めての事ではない。今までにも何度か提案してはいた。

結果がどうであるかは、恭一の現状を見れば一目瞭然だろう。そして、この度もまた、説得失敗である。
「良いですよ。まあ、損をするのは貴方ですからね」
言って、酒が入っている棚とは違う棚を開けた。
入っていたのは、和で統一されたこの店内にそぐわない洋酒。ラベルの色が褪せた古臭いものから新品同様の物まで多種多様な瓶がずらりと並ぶ様は、かなり異質な光景である。
これらは店主秘蔵の酒達であり、価値の高低ではなく純粋に味の良さを評価され集められた品々だ。
以前、何故洋酒が多いのかと恭一が聞いたところ。
「僕、日本酒より海外のお酒の方が好きなんですよ」
との事らしい。
だったら居酒屋でなくバーの方が向いてるのでは、と恭一は思ったが、下手に追求する理由も興味も無かったのでそれで話を打ち切ったのだった。
「いつ見ても、違和感出しまくりだな」
お気に入りの一本をグラスに注いでいる蒼馬に言うと、彼はにこやかに笑い。
「今更ですね」
恭一に瓶を放った。
本当なら時間の猶予など無いのだが、酒の一杯に掛かる時間などたかが知れている。
話をはぐらかした詫びと気遣いの礼がわりにと、恭一は自分のグラスを満たした。
「……乾杯」
静かな蒼馬の声を合図に、二人は同時にグラスを上に掲げた。
恭一は一気にグラスを煽ると、半分程中身を残している蒼馬に向けてグラスと瓶を投げ、何も言わずに来た方向へと身を翻す。
「愚痴ならいつでも聞きますよ」
投げられた二つを片手で受け取った蒼馬が言うと、恭一は振り返

らずに軽く右手を上げたまま、蒼馬の視界から消えた。
恭一の気配が店から消えたのを確認すると、蒼馬は残っていた中身を飲み干し、また注ぐ。
「無駄に格好つける所は、今も昔も変わりませんか」
誰に言うでも無く呟いて、蒼馬はグラスでゆらゆらと揺れる水面に目を落とす。
蒼馬は恭一に出会い、変わった。
友を知り、生きる事を知った彼が最初に感じたのが、恭一の危うさだった。自分を助けてくれた人物には、自分より危険な場所に居るにも関わらず助けてくれる人は居ない。
蒼馬は恭一の周りを知った時、助けたいと思った。なんとか彼の負担を減らしたいと思った。いや、それは今でも変わら無いし、これからも変わる事は無いだろう。
恭一は蒼馬の友であり、恩人であり、家族だった。あの時から、ずっと。
たまには過去に浸るのも悪くないだろうかと考えながら、彼は既に去った男に向け、再び言葉を紡いだ。
「無知なお姫様と格好つけな騎士に、乾杯」
蒼馬のグラスと、持ち主の居ないグラスが、キィンと澄んだ音を立てた。

召使、情報収集す（後書き）

蒼馬くんの情報屋は恭一くんしか知りません。さて、お嬢様は一体何処におられるのでしょうか？

召使、疾走する（前書き）

長らくお待たせ致しました。

召使、疾走する

蒼馬の居酒屋から出た恭一は捜査の足を得るべく、早速携帯電話をコートの懐から取り出した。
電源を入れ、見慣れた名称をアドレスから探してコールする。
数回の呼び出し音の後に出た相手は、奈津。
「主任！！　一体今どこに居るんですか！！！！」
開口一番に電話が壊れるのではないだろうかと言う程の声量で怒鳴る奈津に、流石の恭一も顔をしかめ耳から電話を遠ざけた。
「いきなり辞めるとか言ってお嬢様を放っておいて！！　しかもどこか行っちゃうし電話も通じないしで！！　今まで何してたんですかこっちは大騒ぎですよ！！！！」
普段の彼女からは想像出来ない剣幕に、恭一はこれまでの自身の行いを鑑みた。
いきなりの辞職宣言に加え愚痴さえぶち撒け、警護対象を放置して行方不明の音信不通。成る程、怒鳴られても仕方がない行為である。尤も彼としては、警備部が何とかするだろうと彼等の対応に高を括っていたのだが、過大評価だったのか若しくは辞職宣言をしたとしてもすぐに護衛を放り出すとは思われなかったのか。
いずれにせよ怜香が掠われた今、そんな事を考えている暇は無い。さっさと電話の向こうで怒り心頭の彼女を宥め伝えるべき事を伝えるべく恭一は口を開いた。
「ああ、悪かったな奈津。それで、目星は？」
奈津の文句をまるで誠意の無い謝罪一言でばっさりと切り捨て、本題へ強引に持ち込んだ恭一の耳に、電話口からため息が流れてくる。次いでキーボードを操作する気配がした。
恭一がこういう話し方をする時は大抵何を言っても暖簾に腕押しなので、彼女は早々に諦めて手元にある端末から報告された情報を引き出す事にしたらしい。たまに愚痴が聞こえるのは、まあご愛嬌

と言うものだろう。
　それからすぐに恭一に警備部の現状が伝えられる。
「とりあえず今報告されてるのは、お嬢様が行方不明になったのは校舎から此処までの過程。大手の組織にこれと言った動きが無いので小規模のものやたまり場等をあたっていますが、今の所成果はありません。情報も、流れていませんし」
　報告が進むほど、奈津の声は沈んでいく。これまで幾度と無く誘拐を防いできた自慢の情報網が此処へ来て全く役に立たない事に、酷くショックを受けているようだった。
　組織と言うものは、大きければ大きい程、機密保持が困難になる。スパイしかり、武器の類の購入しかりだ。また、派閥による枝分かれを利用すれば、身内を売る者も少なくない。
　戸澤家の警備部は、主に恭一や奈津の仕業だが、こういった方面の情報に非常に価値を見出だしていた。故に奈津としては、得意分野で役に立てないと言う、まるで自分の無能さを突き付けられたような気がしているのだろう。
「そうか。奈津、今散らしてる奴らを三ヶ所にまとめろ」
「え？　主任、今何て？」
　思わぬ提案に、奈津は間の抜けた声を出し、聞き間違いだろうかと再度説明を求める意を恭一に返した。
　予想通りの反応をした奈津に恭一は情報を上乗せして繰り返す。
「散った奴らを三ヶ所に集めろ。詳しい場所は電話の後で送る。ただ、その内の一つに子があるからな。荒事にばかり気が向き過ぎると手痛い目に会うぞ」
　子と言うのは、大組織の息の掛かった組織や直接配下に置かれている組織の事を指す言葉として使われている。
　こういった組織に迂闊に手を出すと、場合によってはその上にある組織が出張ってくる可能性がある上、最悪こちらの浮足を狙い余計な邪魔を仕掛けてくる事もあるのだ。
　彼等は、金が入る方に付く。敵対しているどちらか一方に武器な

り情報なり使い捨ての人員なりを送る代わりに見返りを要求してくるのである。一度受ければ、後は事ある毎にたかってくるし、断れば敵側に援助が行く。隙を見せると非常に厄介な存在と言えよう。
本来大手は末端と言えどリスクを負いたがらない。組織が大きくなれば目を付ける者も当然増える。下手に迂闊な動きをすれば容易に漏れてしまうからだ。普通は裏で援助が定石なのである。
にも関わらず、今回は名前が上がっている。裏があるのか、余程自信があるのか。何れにせよ油断は許されない。
だと言うのに、奈津から出たのはどうにも恭一の気を抜く言葉だった。
「心当たりがあるんですか！？」
了解の意を伝えるでも無く、子についての情報を求めるでも無い。ただただ驚きに満ちた声。いくら打ちのめされていたとしても、それはプロとして余りに情けない醜態と言えた。
恭一も僅かに嘆息する。電話に出た時から彼は思っていたが、どうやら奈津は大分興奮しているようだ。
無責任な上司に立腹するにしろ怜香が心配にしろ、自分が居ない今現場責任者である彼女が行動の優先順位を的確に判断出来ないのはよろしくない。が、情が深く自分に素直なのは奈津の美点でもある。
咄嗟に浮かんだ相反する思考に、思わず苦笑する恭一。
「心配なのは解るがとりあえず落ち着け。お前が平静を欠いては組織全体に影響する」
「……っ、すいません」
恭一に言われ、ようやく感情以外に目がいった様子の奈津がいつもの冷静な声色を取り戻した。
「それで、何処の子が？」
完全に先程までの高ぶりを押しやった奈津に、恭一も表情を引き締めた。
「火天だ」

恭一の一言に、奈津が若干息を飲む。
火天。
組織としては新興の部類に入るが、多くの武闘派組織を配下に組み込み拡げた勢力は国でトップクラスの武力を有する。
また、持ち前の血の気の多さから粗暴な脅迫、誘拐、売春など実に単純な金策を取るも、下手に関われば親族もろとも解体され臓器闇市のリストに載るか薬漬けにされて弄ばれるかなので警察でさえ半ば黙認状態を取らざるを得ない。正義にこだわる人間は自分以外が巻き込まれるのを良しとせず、そうでない人間は見て見ぬ振りか尻尾を振るか。巻き込まれれば最悪の部類に属する組織にまず間違いない。
奈津が強張るのも当然の事だった。悪名高い、いや、悪名しかない組織にうら若い、しかも見た目だけはかなりの上玉が掠われたとしたら、どうなるかは想像するまでも無い。
奈津の脳裏に最悪の光景が過ぎる。もし、彼等が身代金目的で無く怜香の容姿に惹かれ絡んだ揚句連れ去ったならば。考えだけで全身から血の気が引いていく。
「奈津、まだ火天と決まった訳じゃない。有力候補ではあるが、それだけだ」
奈津の不安を読み取ってか、恭一がフォローを入れる。
「……分かっています。それで、残り二つは？」
どうやら、無用な世話だったらしい。
多少不安が伺える声色だが、決して役目を忘れていない言葉。二度と目的を見失わんとする意思に恭一は胸中で頷き、質問に答えた。
「残りは認知する必要も無かったクズ共だ。一方は俺が送る場所にたむろするだけの名も無い集団。もう一つは、確かナイトメア・ベルとか言ったか。どっちも素人特有の薬と性欲にしか目が向かない、青臭い集団だよ」
果たして、幸運と言うべきか不運と言うべきか。警備部からしてみれば素人集団と喜ぶべきなのだろうが、怜香の安全を願う者から

すれば彼女の身の危険が増したと思わざるを得ない。
「俺がさっさと本題に移った訳が分かったろ」
「はい……」
強張った声で返答する奈津。
どう転んでも、一刻の猶予も無い。例えこちらの動きが多少漏れたとしても、犯人からの要求を待つなど論外だとばかりに奈津の手には力が篭り、瞳にはすぐにでも行動を起こさんとする意思が見て取れる。
だが、恭一の情報にはまだ続きがあった。
「後、これはついでだがな、柳水が嗅ぎ回ってる。穴を作らないようそっちにも気を張ってろ」
柳水。
こちらも火天と同じ大組織の一つで、特技は情報売買である。火天と違いあまり武力に主体は置いておらず、専ら対象の弱みを使い脅しをかけたり、フェイクを掴ませて敵を翻弄すると言った搦手を得意とする組織だ。
「柳水、ですか。わかりました。情報の隠蔽を強化しておきます」
「頼む。俺は今からナイトメア・ベルの方に向かう」
恭一が言うと、奈津が意外そうに聞き返してきた。
「火天じゃ無いんですか？」
蒼馬も言っていたが、今回の有力候補は火天である。滅多に尻尾を見せない大手が動いているのに、何故わざわざ雑魚へ目を向けるのか。奈津も当然恭一は火天に向かうとばかり考えていた。
「いや、ナイトメア・ベルだ。少し気になる事がある」
「……そうですか。では、こっちは火天と名無しに人員を多めに回しておきます」
奈津は恭一が火天を後に回す事に困惑したが、彼が言うのだから何か理由があるのだろうと、深く追求はせず了解の意を示す。
それを聞いた恭一はただ一言、
「任せた」とだけ言って早々に通話を終了させた。

恭一が切って少しして、奈津の携帯電話に三ヶ所の詳しい地図が送られてくる。即座に彼女は部下達に情報を振り分け三組の捜索隊を作り上げると、それぞれの場所へと向かわせた。
一方、地図を送り終えた恭一は店の近くに停めておいたバイクに跨がると、ナイトメア・ベルの本拠地へ向けて疾走を開始していた。
道中、彼は奈津に言った気になる事について、自分の中に漂う情報を纏め、思考を固める。
恭一が蒼馬に頼んだのは、一流か三流以下の組織の情報と、三流以下のたまり場。
普通、こう言った組織は力を付けるまで名も無い集団として扱われる。人員の増加や武装で徐々に力を付け、ようやく名前を呼ばれる資格を得るのだ。その時初めて、組織の仲間入りを果たす。逆に言えば、名前持ちはそれなりの人員や武装を所持していると言う事だ。
恭一が蒼馬から聞いた情報によれば、ナイトメア・ベルの人員も装備も、経験さえももう一つの集団と大差が無い。では、何故か？
疑問に思うも、蒼馬でさえ知り得ない事が恭一に分かるべくもない。
ただ、怪しむ理由としては十分だった。
火天は強大で、凶暴。恐ろしいまでに相手の不安を誘い、嫌が応でも注目を集める。周りへの意識を削り取って。
「まさかとは思うが、火天を隠れ蓑にする、か」
思わず声に出てしまう程の異常事態である。
もしそうならば、彼等はこちらと火天の両方を出し抜いたと言う事だ。素人同然の組織に出来る技ではない。
まず間違い無く取り越し苦労だとは思いつつも、恭一は最悪の場合を考えてナイトメア・ベルへ行く事を決断した。自分の判断が正しいのかは判らない。できれば正しくない、火天が犯人である事を彼はつい考えているのに気付き、思わず苦笑した。
「まさか、火天を犯人と望む日が来るとはな」

制限速度を大幅に越えて疾走する影から漏れた皮肉は、誰に届くでも無く、彼に切り裂かれる風の中へと溶けていく。
一体、どれだけの影がこの平凡な街に内包されていると言うのか。ヘルメットを通して見える景色が、恭一には酷く色褪せて見えた。
まるで目に映る全てが周りを欺く為の擬態、いや、平凡と言う色で塗り潰された張りぼてのように。
「……あそこか」
流れる景色の先に目的の建物を視界に捉え、恭一の目が鋭さを増す。
場所は既に人工の光を失い、僅かな星と欠けた月が照らすのみ。
周りにひしめくのは、打ち捨てられた前世紀の欲の成れの果て。老朽化が進み、誰からも見捨てられた旧市街。この街の隅にあるそこは、巨大なゴミ捨て場と形容され疎まれている。
恭一の先には、ボロボロに崩れ、辛うじて雨風を凌げる程度の廃ビルが立ち塞がるようにそびえ立っていた。
「捨てられた地区。確かに人目は無いし広さもあるが、今更ここに出入りする組織があったのか。」
廃ビルの五十メートル程手前にある、壁の役割しか成さない建物の残骸にバイクを隠した恭一が、廃ビルを見上げながら呟いた。
一瞬、懐かしむような瞳を浮かべるも、すぐに鋭い殺気を込めたそれに戻し、気配を殺して出入り口になりそうな崩れた壁に近付く。
背中越しに中から気配を探り、そこで何かを感じ取ったのか、恭一が視界ぎりぎりに中の様子が映るように顔を覗かせた。
「……っ！？」
一体何を見たと言うのか。
彼の目は若干動揺したように開かれ、口からは僅かに呻きが洩れる。
次の瞬間、彼は勢いよく建物の中へと飛び込んで行った。

召使、疾走する（後書き）

次話は怜香さんの方に移ります。どうぞお楽しみに。

召使、知らぬ所で（前書き）

今回は怜香さんメインなのです。

召使、知らぬ所で

「っ……う……ん」
頭が霞掛かり、体に異様な気怠さを感じながら、暗転していた意識から怜香は目覚めた。
「こ……こは？」
鈍る思考が先ず捕らえたのは、見覚えの無い場所で目覚めた違和感。
ふらつく視界のまま左右に視線を巡らすも、やはりこのような寂れた廃墟に関する記憶など彼女には微塵も沸いてこなかった。
「私、何で？　っぅ」
とりあえず身を起こそうと四肢に力を加えた瞬間、怜香の口から短い悲鳴が上がる。
思わぬ痛みに顔をしかめながら、何度目かの動作で自分が拘束されている事に気付き、怜香は愕然とした。
痛みによる刺激が彼女の思考をクリアにし、現状を理解してしまったからだ。
自分が掠われ、捕われていると言う、信じ難い残酷な現実を。
「おお、お姫様がオメザメだ」
唐突に、くたびれた瓦礫の墓場に、怜香ではない誰かの声が響いた。
ビクリと肩を震わせた怜香が勢い良く声のした方向に顔を向ける。
「あ、んた。誰よ」
「うっわ、やっぱりすっげー可愛い」
「だよなー、勿体ねーなー。ヤりてーなー」
目に入って来た声の主に、彼女は気丈に振る舞い、怯えを隠さんとする小さな叫びをぶつけるも、それは無情にも別の方向から投げられた何気ない下卑た言葉に掻き消された。
怜香が強張らせた表情のまま目だけを向けると、今まで視線を向

けていなかった位置にたむろする複数の人影の姿。
皆一様に気味の悪いニヤついた顔をした、まるで自分達が元凶ですと言わんばかりの男達が、そこに居た。
よく見れば最初に声を発した男も、お世辞を付けても普通とは言えない荒んだ容姿である。
「……目的は、お金？」
思考を凝らし、言葉を選ぶ怜香。
今の状況を少しでも把握し、曲がりなりにも打開を考えるとするならば、迂闊な罵声や虚勢は口走れない。また、先程のお姫様、手を出せない等の言葉は、どうやら何か目的があるように取れると、驚く程クリアになった思考でそう考えた彼女は、とりあえず頭が緩そうな男達に直接目的を尋ねる事にしたらしい。
このような人種は、たいてい優位に立てばべらべらと自慢げに目的を語り、相手を見下す態度をとる輩が多いだろうと睨んだ上での問いだった。
「あん？　意外とれーせーだなあんた。まいいや、そーだよ。金さ」
内心で自分の見立てが当たった事に僅かな喜色を滲ませ、怜香は情報と希望を貪欲に模索し続ける。
「身代金？　止めた方が身ためじゃないの？　意外と誘拐の成功率って低いのよ」
「……あんた、自分の立場わかってんのか？」
話していた男から険呑な雰囲気を漂わせ始めた頃、怜香がにやりと笑みを浮かべた。背中から尋常でない汗が噴き出す程の恐怖と緊張、それらを悟られまいと必死に抑えながら。
「もちろん。……だから、こうして取引を持ち掛けるんじゃない」
怯え、泣き叫ぶのが普通のこの状況で目の前の少女から飛び出した言葉に、それまで下卑た笑みに支配されていた場がしんと静まり返った。
「あんた、なに言ってんだ？」
それまで話していた男、どうやらリーダー格と思われる彼が訝し

気に言葉を返す。
「そのままの意味よ。私は無事に帰りたい、あなた達はお金が欲しい。でしょ？」
感情の全てを隠し、ある種の親しみ易さすら香らせる微笑に、男は息を飲んだ。
怜香のあまりに物怖じしない態度に、僅かな動揺が流れる。
だがしかし、それも一瞬の事。
「……へぇ、おもしれぇ。で、どーしてくれる訳？」
再び口を開いた男には、既に動揺も気圧される様子も見られないニヤつきが浮かんでいた。
如何に息巻こうと、どんな雰囲気が流れようと、今、年端もいかない彼女が四肢を封じられている事実は変わりはしない。
状況からして怜香から感じる違和感など、取るに足らない細事として扱われたようだ。
場の流れを呑み込むには、やはり彼女には足りないものが多過ぎた。せめて後数回、このような修羅場を潜れば可能性は見られるのだろうが、そんな事は今求められていない。
今彼女に求められているのは、絶対的な立場にある事を自覚し直してしまった相手を前に、どこまで気を引き、自分の提案を魅力的に見せるかだ。
彼等が金銭目的なのは誰の目にも明らかだろう。手荒な事に至らない理由は未だ明かされてはいないが、少なくとも怜香の提案を聞くだけの耳は持ち合わせている。
それまで得た情報を脳内でまとめていた怜香が、一筋の光明を見出だす。
ならば、よりリスクの少ない餌を出せば、短絡的な彼等なら、やりようによっては或いは、と。
僅かでも緊張を減らす為の短い息の後、彼女は導き出した希望の撃鉄をゆっくりと落とした。
「……狂言誘拐って、知ってる？」

硬くなった頬を無理矢理歪め、渇いた唇を裂けんばかりに引き、射殺さんばかりの敵意を持ち得る全ての理性で御す。
作り上げたのは、彼女の今までの人生で最高の、悪魔の笑み。
「……なんだそれ？」
怜香の作り出した言葉の、策謀的な音に導かれるように尋ね返す男。
好奇心の消えないよう、彼女の口は最大限の魅力を漂わせる言葉を紡ぎ出す。
「ようは、私と組むって事。実は最近、我慢できない不満の種があってね。どう問い詰めてやろうか考えてた所なの」
「はあ？　あんた……お嬢様なんだから、かってに問い詰めりゃいーじゃねえか」
呆れたような表情をした男に、怜香の嘲笑が被さった。
「あなた、勘違いしてない？」
大抵の者なら見て取れる侮辱の様子に、男は隠す事無い苛立ちを見せる。
「あ？　何がだよ？」
「お嬢様と言えば、なんでも勝手が通るとか思ってる見たいだけど、実際はそんなの漫画の中だけよ。訳の分からない警備部に、能面のような意思の無い召使達、つまらない虚勢に凝り固まった親族。本当、嫌になるわ」
出来るだけ険悪に、心底全てを憎んでいるように、怜香は表情を形作る。
「……へぇ、だから、痛い目みせたいって？」
思うがままに生き、不満などたかが知れていると印象付けていた少女から見られる予想だにしないどす黒い一面に、男は怜香の思惑通り意外そうに相槌を打った。
普段の下らない体面作りの為の猫かぶりが、まさかここまで自分を救う手段に役立つ事を少なからず皮肉に思いながら、怜香は続ける。

「そんな下らない理由じゃないわ。私はね、変えたいのよ。この私の手で戸澤をね。その為の資金を得たいだけ」
「……」
返って来た反応は、無言。
果たして今の話は彼等の食指を動かすに値する内容だったのか。
怜香の心中を表すかの様に彼女の額に嫌な汗が流れた。
「くっ……はは、はっはっはっはっ！　とんでもねーオヒメサマだこいつ！！」
リーダー格の男の笑いを皮切りに、巻き起こる爆笑の渦。
口々に怜香を褒めているのかけなしているのか判別のつきにくい言葉が彼女に投げられる。
彼等がどんな気持ちで言っているかは分からないが、少なくとも怜香には馬鹿にされているようにしか聞こえなかった。
怒鳴りたい気持ちを必死に押さえ込み、笑顔のまま返答を待つ怜香。
実際、手を組むと判断され拘束を解かれれば、幾らでも打開の幅は拡がる。彼女は今、彼等の心象を悪くする訳にはいかないのだ。
「あんた、いいとこのオヒメサマにしとくの勿体ないよ」
苦労が実ってか、リーダー格の男が笑い、両手を肩位置まで上げた。
肯定的な男の態度に、怜香の顔に久しぶりに素直な表情が浮かぶ。
それは、安堵。
「でも、だめ」
そして、驚愕。
男が両手で罰を作っておどけた態度で否を示した途端、怜香は驚きの余り咄嗟に息をつく事さえ忘れた。
「ど、どうゆう事？　私と組んだ方が明らかに成功率は上がるわ！
その方が――」
「だーって俺らまだ死にたくねぇしー」
「……は？」

動揺のあまり自分を作るのも叶わず、狼狽を撒き散らしながら怜香が問い詰めると、思わぬ返答が彼女の言葉を絶ち切った。
好みや気分と言った理由ならば、論理的に諭せば何とかなると考えていた怜香にとっては、まるで理解できない理由だったのだろう。聞いた途端彼女から漏れたのは、なんとも間の抜けた声。
余程怜香の様子が可笑しかったらしく、男はにやにやと笑いながら彼女を指差し、優越感に浸るように理由を話し始めた。
「あ、いいねその顔。やー、俺としてはあんたに乗ってもいーんだけどさ。残念、金はあんたの家から貰うんじゃないんだよね」
「っ！？　まさか！？」
はっとした表情で男を見る怜香には、理解の色が浮かんでいたが、同時にそれ以上の絶望も見受けられる。
男はそれを見て満足そうに頷き、言った。
「そ、俺らはただ、あんたを掠って来いって言われただけ。成功したら、金と組織の一員にしてくれるんだと」
短絡的な彼等がよりリスクの少ない提案を呑まない理由とは。
簡単だ。誘拐や交渉のリスク等、彼等には元々無かった。彼等はただ、どこか別の組織から依頼されただけなのだ。怜香を掠い、引き渡せと。
「っ！」
ぎりっと、怜香の口から歯を食いしばる音が漏れた。
自分が捨て置いた情報が最も重要で、希望を根底から覆すものだったと言う事実に、怜香の胸中に悔しさが溢れる。
今まさに絶望を噛み締めている怜香に次に掛けられた言葉は、吐き気がする程ふざけたものだった。
「でも、俺達を満足させてくれたら、乗っちゃうかもよ？」
満足、とは考えるまでも無い。
外聞を取り繕う事など投げ捨て、とうとう怜香は溢れ出る憎悪を叩き付けた。
迷う価値すらない余りに馬鹿げた提案。

怜香を抱いた程度でころころ変わる程度の意思なら、リスクが低い時点でまず間違いなく提案に乗る筈であるし、そもそも彼等が彼女の提案を断ったのは自分の命欲しさである。つまり、彼女を掠い、渡さなければ彼等は取引をした組織に消されると言う事だ。

彼等の提案が怜香を弄ぶ為のただの方便なのは明らかだった。

故に怜香も、全力で抵抗する。

彼等の事情を知り、十二分に現状を理解した怜香は、もはや交渉はしない。駆け引きなどする価値は無い。それでも、無抵抗になる気もさらさら無かった。

「ふざけた事したら、舌、噛むわよ」

怜香に残された手段は、もう自分の身体を使った抵抗のみ。もちろんただの脅しであるが、怜香を無事な状態で渡さなければならない彼等にとってはそれなりに有効な手段に思えた。

だが、それも無駄な努力に終わる。

「なー、もうやっちゃわね？」

「いや、それはやっぱマズイっしょ」

もはや彼等は怜香から興味を移していたからだ。則ち、彼女の抵抗も意思も相手が認知していないのである。

彼女を余所に、尚も彼等の下卑た会話は続く。

「だからよ、ようは壊すなってんだろ？　こんな腹黒がヤったぐらいで壊れるかっつの。それに、あっちから誘って来たっつーなら問題ないっしょ」

「おー、お前あったまいいなー」

「マジ！？　俺すっげ好みなんだけど」

事態は、最悪の方向に向かっていた。

怜香の画策は彼等から純粋な、所謂、儚いお嬢様と言うイメージを完全に塗り替える結果を生み出したのである。

遠慮する必要の無くなった相手に礼を尽くす程、彼等は理性的ではない。今や彼等の脳内には怜香をどう弄ぶかしか浮かんでおらず、目は彼女の肢体を舐めるように見つめている。

「っ！？　ほ、本当に舌噛むわよ！」
息を呑み、身動きの効かない身体を震わせながら悲鳴のように叫ぶ怜香。
羨む視線、蔑む視線。今まで怜香はその存在故、普通の人間より多くの視線を感じる機会があった。中には当然、今の彼等の視線に似たものもあったが、そのなんと可愛いかった事かと、怜香は思い知った。
生半可なものではない、人を弄ぶのに何の躊躇も遠慮も無い、純粋な暴力の意思の宿る視線。
近付いて来る男達に、意味を成さない抵抗の意思はあっさり削られ、恐怖が怜香の心を埋め尽くしていく。
「ひっ！　あぐっ！？」
悲鳴の瞬間、何処から取り出したのか、ボロボロの布切れを口に詰められる怜香。
同時に男達が、彼女の体を覆わんばかりに手を伸ばす。さながら、砂糖に群がる蟻といった所だった。
「ーーっ！！　ーーっっ！！」
着ている物が次々に引き裂かれ、肌の露出が増える中、ひたすらに怜香は抵抗する。目に涙を浮かべながら、縛られた体をじたばたと動かすも、それはあまりに稚拙な阻害に他ならなかった。
確実に近付いている最悪の瞬間に、彼女の恐怖に染め上げられた心に、遂に絶望が見え始める。
不意に、怜香は滲んだ視界の端に、この建物に入って来る人影が見えた気がした。

召使、知らぬ所で（後書き）

怜香さんぴーんち。次回、どうなるんでしょうか。

召使、翻弄される（前書き）

恭一君、廃墟に突入ですよ～。

召使、翻弄される

「ちっ。ある意味、予感が当たったか」
廃墟に踏み込んで辺りを隈なく見渡した恭一は、吐き捨てるように呟いた。
彼の目の前には、複数の男達の姿。いや、正解には、男達だったものと言った方が正しいだろう。
廃墟の中には、惨劇が広がっていた。
恭一の見渡す限り、息をしているものはいない。廃墟に相応しい、生命の成れの果てが、そこかしこに景色の一部として転がっている。また、中心部には、服の切れ端と思われる小さな布が数枚に、手か足かを縛っていたらしい短めのロープがあった。
この場合、怜香が此処に捕まっていたと考えて、まず間違いないだろう。
彼はひと足遅かった事実に舌打ちし、一つ一つ骸の様子を確認して回った。
「やられてから、二、三時間ってとこか」
火薬の残り香、血の状態、硬直具合等から、惨劇の発生に大体の目星をつける恭一。
他に得られるものは何かないかと、彼は尚も検分を続ける。
全身に無数の穴が空いているそれらを見て、彼は、ふと違和感を覚えた。
「……どういう事だ？」
違和感はすぐに疑問となり、恭一の思考に食い込む。
確認の為、彼は今一度全ての骸に目をやるが、単に感じた違和感を確かな異状にするだけに終わった。男達の誰一人として、武器らしきものを持っていない、と言う異状に。
武器が無い訳では無い。その証拠に、ガラクタの上やズボンの後ろ、上着の内ポケットには、子供のナイフ等では無く、立派に銃が

存在している。
不意打ちにしても、誰一人手に持ってすらいないのは、明らかに異状だった。
一目見て、嗅ぎ付けたどこか別の組織にでも襲撃されたかと考えていた恭一は、そこで初めて男達の倒れている位置に目を向ける。
ばらばらに散っているように見えたそれだったが、よく目を凝らせば、ある形が見えてきた。
骸のほとんどが入口方面を向くか、向いていた跡があるのだ。加え、誰も隠れたり、死角に回り込んでいた様子が無い。
武器も持たず、警戒の跡も見られないと言う事はつまり、彼等は戦う必要性を感じていなかったと言う事に外ならなかった。
「裏切りか……いや、違う……まさかっ！？」
恭一が思考を巡らせ、ある結論に達した瞬間、彼の携帯電話が誰かからの連絡を訴えた。
「こんな時に」
思わぬ事態の悪化に、恭一は早足で入口に向かいながら、内心歯噛みして電話に出る。
相手は元部下で、士熱に向かったメンバーの一人だった。
「どうした」
『主任！　士熱の一部が武装してそっちに向かっています！！』
「なんだと！？」
部下の言葉を聞いて、思わず足を止めて恭一が叫ぶ。
怜香を掠った可能性のある三つの組織の内、一つが壊滅、そしてもう一つは、どういう訳か壊滅した組織に向かっている。しかも、戸澤と鉢合わせするタイミングで。
驚くなと言う方が無理な話だろう。加え、偶然と考えるには、あまりに出来過ぎた内容でもある。
さしもの恭一でさえ、少なからず動揺していた。だが、やはり経験な成せる技だろうか。彼はすぐさま脳内で状況をまとめ、事態の解決を図るべく動き出す。

「……分かった、お前等は士熱の裏が取れたらこっちに向かえ」
『了解しました！』
用件だけ伝え早々に電話を切ると、恭一は自分と同じく此処に向かっている元部下達に連絡をする。
『主任、どうしました？』
電話口の向こうから聞こえる、どこか緊張を感じさせる硬質な声が応えた。恭一からの連絡に、どうやら向こうも不穏な空気を感じているようだ。
「お前等、どれ位でこっちに着く」
『斥候は、後十分程で』
十分、と言う言葉に、恭一は眉を僅かにしかませる。
士熱が動いたと聞いた時、恭一は自分の予想が当たっている事を確信していた。
この事件には、黒幕が居ると。
恭一達は今、手札を完全に把握されているにも関わらず、黒幕の手札はまるで見えていないに等しい。
果たして、それ程の芸当をしてのける相手が、恭一の行動を見逃すだろうか。
いや、そんなミスはしない。なぜなら、
「分かった。武装はA、背後から叩け」
先程から此処に近付いてくる数台分の車の音が、恭一の耳に入っているのだから。
改めて、敵の手腕に薄ら寒い感情を覚えながら、恭一は電話を切る。
「今逃げても、どうせ根回しは済んでんだろ。なら、叩くしかないか」
子に手を出すのは得策とは言えないが、曲がりなりにも大手が準備も根回しも無しに全面戦争を始める訳は無い。今回のような突発的で、しかも向こうから仕掛けて来たものは、下部の先走りとして処理されるのが一般的な大手の対応だ。

尤も、黒幕を暴き出せれば、の話ではあるが。
下手に叩くだけでは、無用な遺恨を重ねるだけで、新たな厄災の種を生み出す結果しかない。
車が廃墟付近で停止し、複数の足音が近付いて来る中、恭一は背後にいる黒幕について思考を働かせていた。
「やっぱり、あいつか？　だが目的は何だ？」
恭一の不在、戸澤の動きと言った著しい情報の漏洩。火天と戸澤を出し抜く手腕。そんな輩がごろごろとそこらに転がっている筈が無い。
現在分かり得る情報をまとめると、うっすらとだが黒幕の姿が彼の脳裏に映し出されてきた。
だが、目的だけがどうしても掴めずに、結論に至る事が出来ない。
もう少し思考を凝らし、相手の動きを鑑みれば、もしかしたら目的の片鱗位は見えて来たのかも知れないが、生憎と時間がそれを許さないようだった。
既に、入口間近には複数の足音が響いている。
「……やれやれ」
軽いため息を付き、恭一は黒い革手袋に包まれている手を握り締めた。
彼が視線を入口に釘付けていると、間もなく大小様々な銃器を手や肩にぶら下げながら、そのくせ随分と軽い格好をした者達が入って来る。
死体に塗れたこの場所を見た彼等の第一声は、この場にそぐわない、酷く暢気なものだった。
「あ～あ、間に合わなかった」
先頭に居た男は、そう言うと大胆にも恭一に歩み寄って行く。
警戒の有無などどうでもいいのか、それとも、武器らしい武器を彼が持っていなかったからか、男は構わず恭一に話し掛けた。
「あんた、戸澤の警備部だろ？　やってくれたよな。こいつら、俺達の大事な取引相手だったんだぜ？」

言葉とは裏腹に、男の表情に深刻さは皆無で、ただ恭一に対して、にやついた笑みを浮かべていた。
周りに居る仲間も、獲物をいたぶるかのような、見る者に限りない不快感を与える表情で恭一と男を眺めている。
恭一としてはすぐにでも始めて良かったのだが、わざわざ火天の者がこんな風に交渉のような接触をしてきた事に、僅かだが、ある可能性が彼に浮かんで来ていた。時間稼ぎの意味合いも兼ねて、恭一は警戒を解き、男の話に合わせる。
「……弔い合戦でもするか？」
両の掌を上向きにし、肩位置まで上げたポーズで軽く笑う恭一。
男の方もそれを見て、にやついた笑みに、より感情の黒さを滲ませながら返してきた。
「はっ、まさか。元々取引が終わったら消すつもりだったんだ。寧ろ手間が省けて助かったくらいだよ」
悪びれる様子も無く、さも当然と言った表情で言う男に、恭一は内心唾を吐く。
だが、戦いを避けるに越した事はない。
恭一の感じた可能性とは、もしかしたら、このまま穏便に事態を治められるかもしれないという物だった。
表面上はあくまで不敵な笑みを浮かべたまま、恭一は言葉を紡ぐ。
「あんたらの取引は知らないが、こっちも来てみたらこんな有様でね。どうやら、俺達は潰し合うよう嵌められたらしい。つーわけで、お互いこんなふざけた真似してくれた馬鹿を捜すって事で、どうだ？」
彼等とて、踊らされる道化扱いされているのだ。
もし、怜香が取引の材料にされていたなら、恭一の誘いに乗る確率はそれなりに期待できるものがあった。
取引は偽物で、しかも邪魔者を消す為におびき出された彼等は、良いように利用され更に顔に泥を塗られたに等しい。彼等もそれを敏感に感じたからこそ、自分に話し掛けたのではないだろうかと恭

一は考えたのだ。
「……ああ、そうだな」
男は、随分とあっさり恭一の誘いに乗った。
ここへ来ての思わぬ和平の成立に、恭一の表情が若干の緩みを見せる。
「じゃあ、このまま別れるって事で、問題無いな？」
てっきり、なりふり構わず襲い掛かってこられるような事態を準備していた恭一としては、肩透かしを喰らったような気分で、男の脇を通り抜け――
「！？」
銃声が、響いた。
腰の後ろ辺りに鈍く、重い衝撃を受けた恭一の体が、ぐらりと傾いて、ゆっくりと床へ墜ちていく。
「はっ、ははっ、ははははっはぁ！！」
普通の感性の持ち主なら、思わず顔を歪めてしまうような馬鹿笑いが、廃墟に木霊した。
釣られるように、入口で控えていた男達も、げらげらと醜悪な笑いで輪唱を始める。
「っ！！　お、まえっ！　どう、い、う」
床に四肢を投げ出し、痛みに激しく顔を歪めながら、恭一が首だけで男を睨んだ。
倒れ伏した恭一に対して、男は得意満面に、下卑た本性を露わにする。
「いいぜ、教えてやるよ」
男は銃を片手で弄びながら、しゃがんで恭一の髪を掴み、顔を覗き込む。
「俺達はな、今戸澤がなんか知らねえが浮足立ってるってのと、此処に仕留めれば幹部に上がれるような獲物が馬鹿面下げてるって聞いただけなのさ。なぁ？　戸澤家警備主任、高峰恭一サン」
「っっ！」

恭一の口から、歯の軋む音が漏れる。
事実が明らかになれば、俺達の最初の様子は、彼等に相応しい至極下らない物だった。
彼等はただ、情報通りに目の前に現れた獲物に満足し、遊んだだけに過ぎなかったのだ。
相手は一人。
武器らしい武器も無く、仲間もおらず、戦力差は圧倒的。
叩く前に、絶望の一つでも味合わせ、悲痛に歪んだ顔を眺めて笑いながら踏み潰す。
実に彼等らしい、腐った手口だった。
「満足したか？　満足したなら」
男は笑う。
絶対的な優位に浸りながら、今後の自身の出世を瞼に浮かべて。
「さっさと」
自分達が、
「死ね」
何に手を出してしまったのかも、理解出来ずに。
「やれやれ、どうせそんな所だろうな。貴様等は」
顔にも、声にも、痛みなどまるで無かったかのように、恭一が呟いた。
むくりと、彼が上体を起こすのと同時に、男が糸の切れた人形のように床に倒れる。
「まさか、材料はあの馬鹿でも警備部でもなくて、俺だったとはね。……ちっ、こんな単純な手なら、さっさと逃げときゃ良かったな」
大方、自分が深読みしてこうなる事も予測していたのだろうと、恭一は声に出さず毒づく。
倒れた男に目すら向けずに、恭一は埃を払いながら立ち上がった。
「さ、て。もう情報はなさそうだな。本当ならあいつらで挟み撃ってやる所なんだが」
恭一は、未だ事態について行けずに呆然としている男達に、棒立

ちにしか見えない体制で向かい合う。
「時間が惜しいし、何より」
恭一の最後の言葉は、それまで意識を乱していた男達全員を、一斉に覚醒させた。
「貴様等の存在を、それまで許してやれそうに無い」
それは、目の前の男に対する危険性故の、目に見えない衝撃。
銃に撃たれた筈だとか、一瞬で仲間を倒しただとか言う、理性的な理由からでは無い。捕食者に対峙した獲物のような、純粋で、本能的なもの。
絶対的に敵わない相手からの、途方もない威圧感。
「ひっ！？　や、やっちまえ！！　ぶっ殺せぇ！！」
自分達の優位をもはや感じる余裕も無く、男達はそれぞれに武器を構え、ただの一人に対し過剰な程の銃撃を浴びせ出した。マズルフラッシュと銃声が、ひたすらに場を埋め尽くす。
圧倒的な暴力による、抗いようの無い濃密な死が迫っているにも関わらず、しかし恭一は微動だにしない。
「っ」
恭一の口が、音も無く、笑った。
同時刻、某所にて。
「へえ、中々やってくれるじゃないですか」
電話の向こうからもたらされる情報に、笑みを浮かべる男の声が、静かに響いた。
穏やかそうな声色とは裏腹に、その目は穏やかとは掛け離れた鋭さを放っている。
「……ご苦労様でした。また、お願いしますね」
役目を果たした電話を近くに置いて、彼はふっと息を吐き、笑う。
薄暗い場所に浮かび上がる口元は、確かに笑っているのだが、彼の目は、微塵もその鋭さを失ってはいない。
彼の視線は、ここではないどこかへ向けられていた。
「そろそろ彼も、気付く頃ですかね。……さて、僕も準備するとし

ましょうか。久々に、ね」

人に聞かせるには小さすぎる呟きと共に、男の姿はより深い闇へと溶けていく。

持ち主の消えた二つのグラスが、僅かな明かりに水滴を光らせていた。

召使、翻弄される（後書き）

さてさて、怜香さんはいずこに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6714e/

とある召使の憂鬱

2010年10月8日11時52分発行